

◇ スペシャルトーク ◇

山本太郎さん（俳優）

3.11から1年が経ったんですね。早かった、長かった、どっちなんでしょうね。結局、何が進んだか。汚染だけでしょうね。汚染と人々の忘却。これが一番危険です。

この3.11で僕自身、生き方とは何かを突きつけられました。それまでは自分のためにしか生きていなかった。自分の仕事と趣味、それ以外になかった。37歳。この年になって、生きるってどういうことかを突きつけられた。それまでは当たり前のように過ごしていた。でも、生き延びたい、命の危機に直面して初めて生き延びたいと思った。それが3.11でした。

では、この日に声を挙げたりデモをしたり、集会をしたり。何事かと言われる方もいらっしゃいます。でも、生きることに一番向き合わなければならない日だと思うんです。「生きる」。このことについて、目の前で立ちはだかって、今一番邪魔しているのは原発ですよ。3.11という日に原発のこと、これからの僕たちのことを、いろんな層の人たちが広く話していける、そんな日にしなければならないですよ。だから今日、僕はここに来ました。そして、どうして青森を選んだか。日本中から色々な声がかかりました。「山本太郎、ちょっとこっちへ来て。盛り上げてくれよ」変ですけどね。専門家でもなんでもない、ただ、ひとりの役者、ひとりの市民なんですけどね。でも、「君が来たら、なんだか良く分からない人でも、今まで原発について考えたことがない人でも足を運んでくる可能性があるから。こっちへ来て集会を盛り上げてくれ」と。オファーはたくさん、日本中から声がかかったんです。でも、僕の中では行く場所は決まっていた。青森なんです。

青森に住んでいるみなさんの前で言うのはどうかと思いますが、青森が一番危険なんです。日本中の核廃棄物を受け入れているんですよ。今やもう、そこは満タン。どうしてそんなしわ寄せを受け入れなければいけないか。世界中が諦めた核燃サイクル。世界中が諦めた技術に日本はぶら下がっている。いい加減にしてくれという話。原発1基から出される1年分の排出量を六ヶ所では1日で出してしまう。恐ろしい話ですよ。大きな爆弾を抱えている。東通にもある。これから大間も作ろうと言っている。六ヶ所の努力を無駄にさせないために、大間にも無理矢理作られようとしているんですよ。こんな話が本当に進んでいって、実現したらとんでもないことです。

今、日本は地震の活動期です。いつ起こるか分かりません。その中で、原発を続けるっていい選択なんてあり得ないし、狂っていますよ。今、ここで声を挙げないことは、もう諦めですよ。でも、原発という産業から100億以上の大きな税金が落ちている。それを諦めるのは難しい注文ですよ。でも、それに代わる何かを、みんなで探していくしかないんですよ。命を100億と引き替えにできますか。100億円なんて安いものです。ただ、地元で声を上げることは難しいと思います。福井に行ったとき身に染みました。親戚筋をあたれば、ちょっと行けば誰かが原発関連で働いているんですよ。そういう中で「原発反対、あり得ない」というのは、自分の身内を否定すること、受け入れた地元を否定することになってしまう。でも、そんなことは言っていられない



状況になってきた。地震はいつ起きるか分からない、だったらもう止めなければ仕方がない。一刻も早くやめないとどうしようもない。次に踏み出せない。

今できること。それは、ここにいらっしゃる意識のあるみなさんが、10人の近い人たちに同じ思いになってもらうよう、ネゴシエーションしていく、話し合っていくしかないですね。仲間を増やす以外にやりようがない。仲間を増やしていけば何ができるかということですね。仲間さえ増えていけば、金にまみれた、この政策を推し進めている人たちを引きずり下ろすことができます。誰かをリコールすることも。そこを変えないと何も変わらないでしょう。

青森県だけの問題じゃない。北半球が吹っ飛んでしまうぐらいの勢い。恐ろしい話。これは青森の人たちだけに任せられない。日本中の問題、日本中が青森に押し付けた問題。みんなで解決していくしかない。でも、その解決方法はすぐに見つかるわけがない。3.11からデビューした僕が、そんな大それた何かアイデアなんかを出せるわけない。でも、何が言いたいのか。たくさんの方がこのことについて話していくことによって幅が広がって、突拍子もないアイデアが出てくるかもしれない。再処理施設のことを、ちょっと声高には話せない。この状況がおかしいんですね。このことについて、みんなで広く話せるような、そんな世の中にしていかなければいけない。

みなさんは意識のある方だと思います。でも、どうやってここから意識のない人たちに語りかけていくか。裾野をどうやって広げていくかが一番の急務。今日来られた方が、また新たに10人、その10人がまた新たな10人と話を広げていって、同じ思いになって頂ければ変えられるのではないかと。共有したい気持ちはひとつ、生き延びようということ。そのためには青森を変えなければいけない。日本中で今、青森に力を注いで一歩ずつ解決していく。一刻も早くです。みなさん、語りかけてはもらえませんか。僕ももう10人、新たに語りかけたいと思います。今が正念場です。今年、大きな動きがなければ、このまま何も変わらないと思います。年内中に大きく何かが変わるようなものを掴み取れたらと思っています。みなさんの力が必要です。宜しくお願いします。

◇ スペシャルトーク ◇

鎌田慧さん（ルポライター・ノンフィクション作家）

3.11の大災害から1年。いろんな人たちが亡くなりました。家族の人たちはいま、どんな思いでいるのでしょうか。本当に何とも言えない気持ちになります。ですから、今日は鎮魂の日にすべきだという声も確かにあります。しかし、今日は全国でもいろんな集会が開かれています。この青森県でこれだけ人が集まるというのは、ようやく青森でも脱原発に向かって力強く動きはじめてきた、そんな確信になります。



去年の9月19日、東京の明治公園で6万人の集会を開きました。その時、福島から来た女性が「私たちは東北の鬼です」という発言をしました。怒りと悲しみが鬼にしたわけですが、「ただ鎮魂だけでは済まない、亡くなった人を偲ぶだけでは済まない、怒りをもって新たな行動をしなくてはならない」ということを「東北の鬼」と表現したのだと思います。みなさん、東北の鬼として、これ以上の犠牲を東北に強いてはいけない、押し付けてはいけないと叫ばなくてはならないと思います。

今、どういう状況かと言いますと、ちょうど広島に原爆が落とされた後と考えると分かります。広島に原爆が落とされても、日本の軍部はまだ「国体を守る」などといってグズグズしている間に長崎に落とされました。酷い目に遭いました。ですから、今まだ経済的利益とか、そういうことばかりを言っている政府や電力会社には、次に長崎に落とされるのを待っているのか、というような思いがあります。「もう絶対に、このような犠牲は出したくない。だからこそ、原発から脱却していこう」という運動が全国に蘇ってきています。

「原子力は科学技術だから、せつかく人類が開発したのだから」という意見があります。しかし、間違った技術はもうやる必要はありません。原発は言うまでもなく原爆から始まってきたわけで、原爆の技術を商売に使おうというのが商業利用だったわけです。そういう形で始まって、また原爆から原発を作っていこうという話になっています。日本政府は原発を輸出しようとしています。輸出した相手国がそれから原子爆弾を作ったらどうなるのか。そういうことも原発反対運動に含まれています。

青森県に再処理工場が作られています。私はいろんな原発取材に歩きまわって、案内人に「この廃棄物はどうするんですか」と尋ねても、大概は「ああ、大丈夫ですよ。六ヶ所村に持って行きますから」という風に言っていました。つまり、邪魔なものは全部六ヶ所村に持って行けばいいという形で原発政策が進められてきたわけです。青森県民は本当にバカにされていたわけです。昔、「白河以北一山三文（百聞）」と言われてまして、福島県の白河から向こうは蝦夷という国で、どんな人が住んでいるか分からないというのが、江戸幕府、明治政府の差別観であったわけですが、その白河以北も人間が生活しているという叫び声を上げないというのがないと思います。どうして六ヶ所村に再処理工場が作られたのか、どうして核燃サイクルが作られるようになったか。それは青森県民がバカだからではないのです。騙されたからです。

1969年の新全国総合開発計画。これは日本列島改造という形で全国の過疎地に巨大開発をす

るもので、その大きな目玉として、むつ小川原開発が計画されました。これはオイルショックでポシヤってしまいましたが、当時の計画の中に今の計画がすべて入っています。青森を核センターにする計画が69年当時既にあったのです。しかし、それを竹内知事は隠していました。それで85年から核燃料サイクルの計画が発表されたわけです。甘い夢を見させてくれた、むつ小川原開発の中にこれだけ危険なものが入っていた。濃縮ウランのプラント、再処理工場と低レベル廃棄物の貯蔵施設。高レベルのものは運んで来ないと言っていましたけれども、プルトニウムもフランスやイギリスから運んで来る、こうした計画ですね。今まだ計画されている MOX 工場、核燃料施設。それも全部69年の計画に入っていました。東北電力が東北経済連の代表者ですから、電力会社は既にそういう計画を立てていたのです。

この見栄えのする巨大開発で、開拓農民たちは数多く犠牲になり、反対運動も起きました。村長の寺下力三郎さんが運動の先頭に立っていました。政治は、自分たちで食べていけない（一定の）レベル以下の人たちのためにあると開発に反対していました。彼は貧しい六ヶ所村の村長だったわけですが、若い頃は北朝鮮の朝鮮窒素（日本窒素）に働きに行って、その時に日本人から土地を取奪されて追われた朝鮮の農民たちが、工場の周りに掘っ建て小屋をたてて暮らしているのを見ていました。開発は地元民を犠牲にするという経験があったんです。運動は敗れたわけですが、その時は既に核燃料サイクルのプランがきちんとあったわけです。それを県は発表しなかった、欺瞞の歴史があったわけです。そして今に伝わってきている。騙される方も悪いと言えばそうですが、当時の状況を考えますと、自民党政府が権力を握っていて、村々も自民党が支配していたわけですから鉄壁をなかなか崩せなかった。ですから、核燃料サイクルに対する反対運動は盛り上がりながらも踏破することは出来なかったわけです。これだけ大きな犠牲の後に、今ようやく起ち上がったことは悲しいことですが、起ち上がった以上は、もうこれ以上後ろには向かない、前に行くしかない。今日はそういう決意を込めた集会であると思います。

今、心配しているのは、福島第一原発の4号機の破壊された原子炉建屋の中にある使用済み燃料プール。もう一度地震が来たら崩壊して、中の高熱で燃えている使用済み燃料がどうなるか分からない恐怖にあります。翻って考えると、六ヶ所村のプールにあるものは膨大。それもプルトニウムが含まれていて、それらがどうなるのかという問題もあります。しかし、今までの人たちは、使用済み燃料からプルトニウムを作って「もんじゅ」で燃やすサイクルを考えていましたが、これは絵に描いた餅。既に六ヶ所村の再処理工場は破綻状態です。2系列あったプラントも1系列が完全にアウトで、もう1つも完全に行き詰まっている。ガラス固化体のところは二進も三進もいかない。今年10月に再試験をすると言っていますが、もう18回も延期しておいてまだ出来ない。「もんじゅ」はお金が底を突いている。再処理工場は決して作らせてはいけません。これはプルトニウムで原爆をつくる材料です。

日本が再処理工場と高速増殖炉で頑張っているのは、いつでも必ず原爆を作れる体制にするためです。これは佐藤内閣の時に秘密の外交文書があり、「直ちに核武装はしないが、これから技術的な、物質的基盤をつくる」そうした文言がありました。日本の自民党という支配者が、ずっと日本が一等国であるためには核武装もできるのだということを外国に誇示したい。だからこそ、今原発が行き詰

まっぴりでも、まだやろうとしているわけです。原発があるだけでも不安な時代ですけども、これから核武装に動いていくかもしれないという懸念もあるわけです。六ヶ所村に作られた再処理工場が稼働したら、既にプルトニウムに汚染されているのですが、運転した後はどうするのか。これから50年、100年、1000年、2000年。再処理工場は移動することができない。子孫が生きている間も一緒にプルトニウムがあるわけです。そうしたことを県の責任者はどう考えているのか。原発は安全だと言われてきましたが、これは嘘だったわけですね。

危険なものを安全と言いくるめるために、何をしたか。金です。地元の人にはよくご存じでしょうが、先進地視察ということで、あらゆるところに飛行機に乗せて、旅館に入れて温泉に入れて、ご飯を食べさせて、地域全体にその人達を運んでいったわけです。全国の原発がそうでした。3.11前までやっていました。こういう風に人をバカにして、飲ませて喰わせれば言うことを聞くということを大会社はやってきたし、政府も電源三法交付金としてやってきたわけです。人を金で買収するとか、金をやれば言うことを聞くとか、そういう社会を作って、それに従って生きてきたわけです。例えば、JCOの事故を起こした東海村の村上村長さんは、とてもインテリで穏やかな人で、彼は今、原発は「一炊の夢だった」と言っています。これは唐時代の邯鄲という人が、ご飯を炊いている間に自分が栄達して出世していく夢を見たものの、ご飯が炊き終わった時に夢が覚めて、今のままの貧しい人間だったというものです。東海村は原発の村として反映したように見えたけれども、結局は何も反映しなかった。事故の恐怖に今もさらされているわけです。六ヶ所村も繁栄したと言っていますけれども、村をご覧になれば分かるように、まるで苔でも生えたような感じで、尾鮫沼の周りに4階建ての住宅が出来ただけです。それにちょっとした集会所と商店街が出来ただけで、あとは何も変わっていない。どこが繁栄か。

これから再処理工場が稼働したとしたら膨大な廃棄物をどうするのか。再処理工場は運転していると日常的に放射能を出しています。微量放射能を出し続ける構造になっている。イギリス、フランスでも、工場周辺は汚染されて子どものガンが増えている。事故がなくてもそうした状況になるわけです。それを六ヶ所村が残念ながら引き受けたことになる。しかし、まだ間に合う。運転再開を止めればよい。世論を大きくして運転再開を止めて行けばいい。政策は政府が決める。県が決めるのではない。政府に止めるよう要求していけばいいわけです。政府も選挙によって成り立っているわけですから、選挙で落とされると困るから、民衆の言うことは聞かなくてはいけない。それが民主主義です。

今、日本の人たちは90パーセント近くが原発は嫌だと言っています。賛成している人たちは原発で儲かる人たちか巨大産業だけです。核武装はそれほど難しいことではない、今の技術でできる。そうした危ないことを我々が知らないうちに進められてきたのは無関心だったから。無関心は罪です。政治家は政治資金をもらって、経済は全部原発に頼って生活しているわけだし、言うのも憚られるが、原発メーカーの労働者も原発はあった方がいいとして反対していませんよね。しかし、原発は一方の少数が利益を得ても90パーセントは利益を得ない。福島の人たちは、自分の家族すら探しに行くことが出来なかった。自分の家族が流されても消息を尋ねることもできない。周りがすべて放射能に汚染されていて中に入って行くことができない。自分の肉親の死も確認出来ない。全国至るところで、

そのようになる危険がある。運転している原発だけが危ないのではない。臨界、メルトダウン。そういう原発を50以上作ってしまったわけです。54基と言うとアメリカの半分だが、日本の国土面積はアメリカの25分の1、まして四方を地震のプレートで囲まれている海岸に54基。再処理工場、濃縮ウラン工場、そうしたものを作っている。今は2基しか稼働していない。これは驚くべき状態です。54基を作ったが、そのうち2基しか動いてなくても何ら電気には困っていない。

原発はものすごい虚構、フィクションの世界です。原発がなくても十分生活できることが証明されました。5月いっぱいですべてなくなります。それでも何の不自由もない状況が現れます。しかし、それだとあまりにも原発の意味がなくなるのを政府と電力会社は恐れて、必死になって巻き返しています。再開するためにストレステスト、机上の空論で計算して第一次テストだけで強行しようとしています。もう一度、再開するのを許すか。54基が止まったまま平和な静かな時を過ごすか。(再開を断念すれば)60年代の状況に、東海村の原発が稼働する前の、原発が何もない、安全で平和な状況に戻るのです。しかし、廃棄物が膨大にあります。むつ市にも貯蔵施設を作ろうとしています。昔には戻らない。ただ、子孫にはこれ以上の負担を押し付けない。10万年経っても安全にならない物質を先祖の私たちは子孫に押し付けてしまったわけです。これは犯罪行為です。でも、もうこれ以上はやめようというのが大人の選択だと思います。福島の人たちはどういう気持ちでいますか。これから甲状腺ガンが出るかもしれないという膨大な子どもたちの被害、今も出ています。この事態が進んでいく。逃げている人がいる。沖縄はかろうじて安全だとしても、その他の日本はどこへ逃げても逃げ切れない。逃げ切れないところに原発を作ってしまった。ウクライナですと、立ち入り禁止にして新たな町を作っていますが、日本にはそんな面積もお金もない。

青森では、むつ市役所に東京電力が寄付をしている。撤退したダイエーの施設を提供している。市役所がまるごと東京電力に買収されているんです。こうしたものは無数にあり、福島のサッカー場には東京電力が160億円も寄付しています。社会で一番高い電力料金で、残ったお金はそういうところにジャブジャブ使っています。いろんな芸能界の人たちへ配ったり、膨大な金が流れています。マスコミもテレビも。日本のミュージシャンはテレビで仕事をしますから発言できない。アメリカやフランスの女優、歌手は堂々と政治的主張をするが日本ではできない。干されてしまう。そういう社会をつくって来たのが原発。金で支配する社会を私たちは認めてきた。こういう社会から脱却しようというのが「さようなら原発」だと言いましたら、イタリアのベルルスコーニ首相も「Adieu」と。これは最後の別れの挨拶だが、ああいう右翼の人も原発に対しては「さよなら」なわけです。ドイツとイタリアは、かつて日本と一緒に闘った国です。その国が原発をやめようと言った。三国同盟でまだ原発にしがみついているのは日本だけです。まだファッショ体制なんです。原発ファッショ体制。これを破るのが私たちひとりひとりの市民の目だけです。本当にこれからは核燃を認められない。もう一度「核燃反対、核燃まいね!」の運動を起こしていきましょう。今日はその出発点としましょう。命がけで頑張らなければいけません。子孫に笑われます。怒られます。みなさん、頑張りましょう。

◇リレートーク◇

(大間原発訴訟の会・大場一雄さん)



こんなにたくさんの青森の方を前にしてお話するのは初めてです。

訴訟の会は青森にはなく、函館にあります。なぜ、函館で裁判なのかと思われるかもしれませんが、函館から大間までは津軽海峡を挟んで18km。今、裁判をやっている原告の方々の家の窓を開けると、大間の工事中のブルーシート、クレーンが見えます。そんなところで工事をされて、精神的にも肉体的にも苦痛だということで、損害賠償と建設の差し止めを函館地裁に2010年7

月に起こしました。18kmという距離は、青森で言うと浅虫ぐらいまでの距離ではないかと思います。函館からは大間で上がる花火が見えます。それほど近いのです。

2010年7月に170人の原告で裁判を起こしました。そして2011年3月11日、福島の事故が発生してから、二次提訴をすると原告を募りましたら208人が集まりました。合計378人の原告でやっています。原告の8割ぐらいが函館とその周辺の方々です。今までは他人事みたいに思っていたけれど、これで原発ができたらどうなるか。若いお母さん達も参加してくれています。さらに一昨日3月9日に裁判がありまして、福島から去年の4月に避難されてきた3人の子どもたちのお母さんが、福島から函館に逃げてきたかと思いきや、「目の前の大間にできるんだ、何だこれは？」ということで、原告になりました。どこにも逃げられないのだということで、原発を止める使命があるという意見陳述をしました。

今回の裁判は6月8日で、毎回2人の原告が意見陳述をすることになっています。弁護士も函館で若い方が12名、東京で7名、19名の弁護士と一緒に分かりやすい裁判を目指しています。青森でも裁判に協力して頂ける方をたくさん作っていきたいと思います。「さようなら原発・さようなら核燃」に、「さようならプルトニウム社会」を付け加えて、みんなで生きやすい世の中を作っていきましょう。

(あさこはうす・小笠原厚子さん)

あさこはうすは、大間原発敷地内から200m離れたところにあります。敷地の中央部に土地があり、母・熊谷あさ子は、執拗な嫌がらせを受けながらも土地買収に応じず、電源開発を200m移動させました。これによって工事の稼働計画は変更され、平成22年稼働予定が平成24年になりました。福島原発事故は平成23年に起きました。もし、母がそのまま土地買収に応じて土地を売



ることになったら、今頃大間原発は稼働していました。福島原発の事故が起きたことによって、今も大間原発の工事は中断しています。日本には54基の原発があります。もし、大間原発に燃料棒が入って稼働されたら55基目。これ以上、日本に原発は要りません。

私は大間町で生まれました。故郷が大好きです。愛しています。そして、青森県出身でもあり日本が大好きです。この日本を守るために、絶対にこれ

以上の原発を作らせない。今、日本だけでなく、世界からもあさこはうす宛てに応援のメッセージがあります。大間原発は世界からも注目されています。「何とかして大間原発を止めてくれ、あさこはうす頼む!」そういうメッセージがいっぱい来ます。何としても工事を中止させなければいけません。もし、止めることができたなら、絶対に世界にも影響を与えることができると思います。原発に対して皆がもっともっと興味をもって欲しいと思います。何としても中止させるように皆さんと一緒に頑張っていきましょう。

(青森県農業者政治連盟委員長・鳴海清彦さん)



私は54歳になります。1985年の4月9日の県議会の全員協議会で六ヶ所核燃料サイクルの受け入れを決めた時、27歳でした。ちょうど人生の半分を反核燃運動に注ぎました。

津軽の農業者の間では反対運動が風化しつつあります。この27年にチェルノブイリの事故が、ましてや昨年福島原発事故。私たち農家にとってみると、本当に他人事ではありません。ちょうど50歳、家畜を飼育している農家の方ですか、牛舎の壁に「原発さえなければ」と書いて自ら命を絶ったそうです。

私たちは何を求めて何をやらなければいけないのか。自分達の子どもや孫に何を遺さなければいけないのか。私はたまたま、農家の長男に生まれました。鳴海家は津軽で287年、私が13代目です。青森県でリンゴが作付けされて138年、この素晴らしい財産を子や孫へ残すためにも、もう二度と核燃料サイクルも原子力発電も要りません。今日を起点として原子力発電所、再処理施設、これらについて止めて行きたいという思いで一杯です。54基は5月いっぱい止まります。しかし、計画されている14基は、3割近い施設が青森県に計画されています。

昨年、「The Wall Street Journal」の記者が、うちの畑に来ました。「青森県民はそれでも何も感じないのか?」と散々言われました。私も農政運動の代表団として、先頭に立ってこれを止めて行きたい。そのためには何とかみなさんの力を貸して欲しいです。この集会を機に、共に止めるため、ひとりひとり頑張っていましょう。

(花とハーブの里・菊川慶子さん)



六ヶ所村は今朝9時半、津波の避難訓練でサイレンを鳴らすとっておりました。でも、津波の避難訓練はあっても原子力に対しては全くないのです。ウラン濃縮工場が動き始め、再稼働をはじめました。再処理工場は幸いなことに、まだ止まっています。そんな中で、今年は雪がとても多く、この雪の中で何かあったらどうしようと時々ヒヤッとします。

私はこの冬は南の島で過ごそうと思って、楽しみにしていました。去年の2月に沖縄に行ってきました。本当に天国のような場所で、今年は3ヵ月そこで過ごそうと思っていました。しかし、福島原発事故の後、ずっといろんなことを考えました。その地で暮らしてこそ、暮らしは続いていく、続いていく暮らしを紡いでいくことこそが生活だと思いました。この冬は残念

ながら（雪の）大当たりの年になってしまいました。でもやっぱり、その雪の中でも暮らしていけることはありがたいと思います。

今、福島では帰ることができない人がいます。先ほどの歌「ふるさと」を福島の人たちは歌えないと言っていました。でも、私たちの毎日の暮らし、暮らしていくための選択、子どもたちはそれを見て育っていきます。子どもたちはすぐに大きくなります。そして、大人達が暮らしていくようになっていきます。大人は子どもたちに、暮らし方を伝えていかなければなりません。福島はまだまだ危険な状態が続いています。あのようなことは二度と起こしてはいけません。子どもたちのために頑張っていきましょう。

（豊かな三陸の海を守る会 事務局長・菅野和夫さん）



青森から170km離れた宮古では、大震災でことごとく海岸、漁業施設が壊滅的な打撃を受けました。今日は会長の田村が来て、みなさんにご挨拶申し上げるところですが、会長自身も山田町内で家屋が半壊し、知人・友人のちょうど一周忌にあたるため来られなくなり、私が代わりに参りました。

私は青森に来るのはやぶさかではないです。かねて初任地である八戸、青森にも務めたことがあります。その際に、八戸であれば下北一周、青森に赴任した際には津軽半島一周と、岩手・宮古で育ったことから、青森の大自然を見て、とても楽しく過ごさせてもらいました。その後、度々お邪魔していますが、ちょうど六ヶ所村に石油備蓄基地が出来た頃でした。エネルギー基地として壮大な原野にたくさんのタンクが並んでいる様、その後、電力関係も担当しているため、風力発電機が尻屋崎までニョキニョキニョキと立っていく様を次から次へと目にしたことがあります。

青森と岩手の係わりをつなぐ私の話。岩手の地元では「へい」という殿様が治めていました。今は地元ではたいへん「小〇」（旗印）っています（意味：困っています。写真参照）。160年前、「へい」の地も飢饉や津波で困窮に至りました。震災と同じように、困窮を南部藩にしゃべってもダメだったので、「伊達藩まで行くぞ」と旗印を携えて仙台に1万2000人が押しかけたと言われています。今度、再処理が稼働するなら、岩手からこの旗印で青森県庁を超えて六ヶ所まで、みなさんと共に訴えに行きます。宜しくお願いします。

（福島県保険医協会 事務局長・菅原浩哉さん）



福島では、今現在も人、大地、海洋の健康を取り戻すため、様々な努力が為されています。福島からの県外避難者は、昨年夏休み前の4万5000人から、12月20日には6万1167人、年を越した2月23日には6万2674人と、ジリジリと増え続けています。放射線の影響を恐れて避難している子どもたち、勿論、放射線の影響も心配ですが、家族がバラバラになって生活すること、子どもの心身の発育に悪い影響を与えているのではないかと心配です。絆を再確認しての震災結婚が取り上げられていますが、放射能汚染、避難をめぐって、いさかや離婚も

また多いのです。避難した方々はもちろん、福島に生活の基盤があり、避難しない人、出来ない人、これらの人が復興を目指し、これからも福島で生きていくために、特に、子どもたちが健やかに成長していけるように支援、施策が必要になっています。私たちは何よりも、一刻も早い事故の収束と、待ったなしの除染の実行、そして原発事故から県民の健康を守る自己負担なしの定期健診、医療受診の実施を強く求めています。子どもたちの医療費無料化の実現は、本当に急がなくてはなりません。

一旦、原発事故が起これば過酷です。福島第一原発から4.2km、初期被曝医療を担うはずの県立大野病院は、その役割を果たすまでもなく、3.3kmの双葉厚生病院も、そして双葉病院では、病院側の再三の要請にも拘わらず、救助が遅れて21人の高齢者が犠牲になっています。何よりも双葉地区では、生活から仕事、地域、未来が根こそぎ奪われて入ることも出来ません。「3.11前の福島へ戻せ」。これは福島県民全員の切実な願いです。一旦事故があると、空間的にも時間的にも被害は甚大です。原発、核燃は、地球、人類と共存できないことは一層明らかです。

福島県は原発事故を受けて、県内の10基の原発をすべて廃炉にすることを決定しました。原発事故の過酷さを知る福島県民として、すべての原発、関連施設の全廃を本当に強く訴えます。皆さん、一緒に力を合わせましょう。

(真宗大谷派僧侶・「福島子ども保養基金」代表・結柴依子さん)



真宗大谷派では、教団としてつい先日、日本にある原発すべてを廃炉にすることを求める声明を政府に提出しました。日本の宗教教団の中で、ここまではっきりと廃炉という言葉を使ったのは真宗大谷派が初めてではないかと思っています。そして私自身は、この3月に福島県で生きる子どもたちに被曝対策支援として、一時的にでも秋田県へ保養に来てもらう団体を設立いたしました。

私は、福島第一原発事故後、何度も福島県へ足を運びました。そして、不安の中で子育てをしていく親御さんたちに会いました。また、屋外活動を制限されている子どもたちにも会ってきました。今日、集会に参加するにあたり、福島で出会ったお母さんたちから「私たちの分もさようなら原発を叫んできてほしい、原発事故によって福島はどうなってしまったのか、しっかり伝えてきて欲しい」というメッセージをもらいました。福島ではまだ、放射能によってあらゆる分断や隔たりが起きています。命を育む環境が汚染され、故郷を奪われ、子どもの命への影響に怯えながら毎日を生きている大人達があります。これからも先ずっと続く長い苦しみになるかと思いません。

昨年末、青森の方達の温かいお力によって、福島の親子22人を1週間、青森で保養させていただきました。青森、秋田は東日本の中でも、今回の原発事故による影響は非常に少なく済んだ地域です。これからは原発、核のゴミ、災害瓦礫を受け入れるのではなく、子どもたちを受け入れていきませんか。命を大事に受け入れていきませんか。子どもたちの未来を安心して育ていけるよう、脱被曝の地として、青森と秋田は今、力強く繋がっていくべきだと思います。

(郡山から青森へ避難・鈴木昌平さん)



私には昨年3月12日、震災の翌日に息子が生まれました。本来ならば郡山で、3人で暮らしていけるはずでした。しかし、原発事故で地元が汚染されてしまい、生まれたばかりの子どもを育てるには不安が大きく、避難を決意し、昨年9月から青森で暮らしています。

原発事故は私たちから多くのものを奪いました。避難のために家族がバラバラになり、みんなで食卓を囲む当たり前の幸せすら叶わない人がいます。農業、漁業者も困っています。避難することで意見が分かれ、離婚した方もいます。避難先で思い悩んでしまい、自ら命を絶った人もいます。本当に酷い事故です。やっと1年経ったわけですが、私は1年経った今でも、心の中で100パーセントこの事故を受け入れることは出来ていません。今でも、そんな事故は起こったことは嘘なんじゃないか、そう思っています。こんなことがあっていいのでしょうか。こんなことが許されるのでしょうか。

私は原発事故の悲惨さを伝えることで、第二の福島、第三のチェルノブイリのような事故が起こらないようにしていきたいと思い、リレートークを引き受けました。この集会に出席された皆様には、原発がいかに危険で愚かなものか再認識して頂き、原発のない安全な未来に向かって歩んでいただきたいと思います。もう誰も同じような目に遭わせたくない、そう思い、祈っています。



1730名の参加の皆さん